

女性が抱える

健康問題とその予防

第2話

婦人科医をパートナードクターに

胸が苦しくなりました。初めて僕のクリニックを訪ねてきた27歳の女性。受付を済ませるなり、待合室の長椅子に寝転んで苦しそうな表情をしています。「どうしたの？」と声を掛けると「生理痛がひどくて」と。

受診した理由はこれではつきりしました。「生理痛がひどくなったのはいつ頃から？」と尋ねると、14歳の時に初経を迎えてからしばらくの間はさほどではなかったが、間もなくして学校にも行けないほどの状態になったといえます。見るに見かねた親から鎮痛剤を与えられるものの、痛みが遠のくのは一時的なものでした。

そして最終的に今回のクリニック受診へと結びつくわけですが、僕としては許し難い思いに駆られました。痛みを取る方法があるのに、27歳になるま



でその情報が彼女に届かなかったこと。初経から13年間、彼女の身近にいたはずの親、教師、養護教諭らが、婦人科受診を促せなかったこと。しかも、彼女の口から出てきた「婦人科に行くのが怖かった」という言葉。女性には、ゆりかごから墓場まで、女性特有の健康上の問題があるのは当たり前であって、それを解決に導く役割を婦人科医が負っているのです(図)。

QOL向上のために婦人科へ行く

2002年だったでしょうが、当時19歳だった歌手の宇多田ヒカルさんが、卵巣腫瘍の手術を受けたことをブログで公表したことがあります。

「(産婦人科に)行ったことのない女の子は、お願い！ 私の心配をする前に、どうかお化け屋敷に入ってみるく

らいの気持ちで産婦人科に行ってみてください！」。

卵巣腫瘍の早期発見を可能にした宇多田ヒカルさんの「お化け屋敷」という言葉がよみがえってきました。

冒頭の27歳の彼女は痛み止めを使っていたようですが、これは対症療法と違って、痛みを作り出している原因を除去するわけではありません。日本ではLEP(低用量エストロゲン・プロゲステン)製剤という、月経困難症治療を目的とした薬剤があります。このLEP製剤の成分はピル(低用量経口避妊薬)と同等ですから、避妊をも可能にします。このLEP製剤はピルと同じように排卵を抑制することで痛みの原因物質を減少させ、月経血量を減少させることができます。ピルやLEP製剤を上手に使うこと



[執筆者]
北村 邦夫
きたむら くにお
日本家族計画協会 会長

自治医科大学を1期生として卒業後、群馬県庁に在籍する傍ら、群馬大学医学部産科婦人科学教室で臨床を学ぶ。1988年から日本家族計画協会クリニック所長。東京都予防医学協会理事、日本母性衛生学会常務理事。2018年より現職。

図 女性のライフステージにおける健康問題

性成熟期

- 月経困難症・・・月経のある女性の約30%
- 子宮内膜症・・・生殖年齢女性の約10%
- 子宮筋腫・・・生殖年齢女性の約20～50%
- 月経前症候群・・・月経のある女性の3～5%
- 卵巣がん・・・1万人あたり4.6人

によって、女性が抱えるさまざまな健康問題の解決に役立つことを知っておいってください。

あなたのQOL(生活の質)を高めるパートナードクターとしての婦人科医とどう付き合っていくか、今一度真剣に考えてみてはいかがでしょうか。